

小説 NOVEL WORKS

大熊狸喜

ILLUST WORKS

挿絵

緑木邑

立ち読み版

ア
ズ
ク
ン
!

かたこ

NAKOKUKU

プロローグ	幼なじみは一人じゃなかった？	006
第一章	春休みの最終日と、初めての触れ合い	022
第二章	新学期と新体験	059
第三章	唯の作戦	102
第四章	藍の想い	149
第五章	休日の道場で	198
エピローグ	双にんぷ	251

登場人物紹介

Characters



はざくら ゆい
葉桜 唯

お隣に住む誠の幼なじみ。誠が気になっているが、その気持ちを素直に出せない強気な少女。

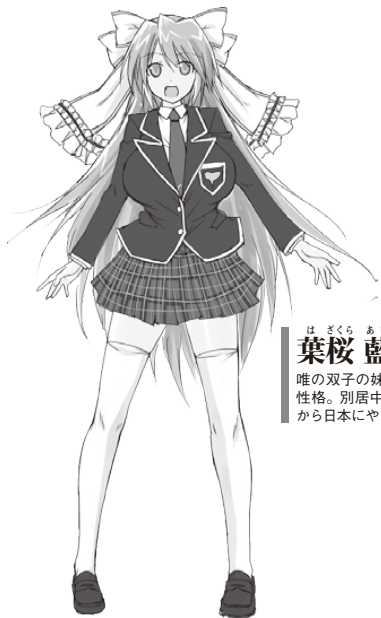


はざくら あい
葉桜 藍

唯の双子の妹で明るくて能天気な性格。別居中の母が住むアメリカから日本にやってくる。

だいきりがみねまこと
大霧ヶ峰 誠

格闘技に熱中する心優しい少年。大富豪の親元から離れて一人暮らしをしている。



亀頭の裏側をモジモジと舐められ、先端の鈴割れを恐る恐るペロペロ。更に本体は柔らかい巨乳で圧迫サンドされながら、吸い付く肌で上下に愛撫。

——れるれる、ちゅぶりゅちゅ……しゅりゅむちゅりゅつすりゅすりゅりゅ……!

恥ずかしさよりも、少年が愛撫を喜んでくれる事が嬉しいらしい。

拙いながらも、唇とオッパイでの奉仕には熱と愛情が込められている。女体も嬉しそうに物欲しそうに、クネクネと官能的にくねられ始めた。

鈴口は誠にとつても意外な弱点だったらしく、腰の奥に向かってジンジンと強い快感が流されてくる。背筋から脳へと、射精欲求のシグナルが送られ続けた。

(こ、このまま出したら……なんか負けたみたいでやだな……!)

絶頂に急ぐ頭でそう思った誠は、目の前で左右する美尻をロックオン。触れるか触れないかの繊細タッチでショーツの縦すじに触れると、そのままスリリつと撫で上げた。

「ひゃんっ——っんまっ、誠っ、ひゃんっ——っ!!」

ちよつと高くて可愛い悲鳴に、男の本能が更に加速。少女腰の左右、ショーツの上端を優しく摘むと、薄い生地をスルんと一気に下ろして、媚尻を剥き出しにした。

「っ——っまっまっ、誠っ——ちゃん……っ!」

下着を失って外気に触れた裸尻に、少女の羞恥がポツと燃え上がる。しかし誠は構わずに、リボン乙女の秘処を余さず注視。

(お、女の子のココ……初めて見た……！)

シックスナインの体勢だから、剥き出しの媚尻は数センチと目の前。両脚が大きく開かれた格好で、普段なら丸い左右の尻に埋もれた谷底までもが、完全に露出している。

二つの柔らか尻脂肪の間で、照明に照らされた後孔がヒクんと収縮。処女の菊座は小指の先程の小ささでシワを集め、薄いカフエオレ色で息づいていた。

「み、見ちゃ……んくん……！」

少年の視線が突き刺さるのか、少女は羞恥して腰をくねらせるものの、力弱くて逆に艶めかしく裸尻を左右させるだけだ。

濡れてツルんとした会陰を過ぎると、濃い桃色の女性器が蜜を纏って収縮している。

会陰のすぐ下には極めて小さく縦長に口を開く、処女の肉孔があった。その数センチ下には、プクんと膨れた微細な尿口。

更に先端には、包皮から僅かに身を覗かせる小さな肉豆、クリトリスが、艶めく肉色でわなないていた。クリトリスから尿口を包む左右の花弁は桃色で、作りも薄くて綺麗な形で左右に整っている。

誠にジツクリと見られる恥ずかしさが、少女の中で快感に繋がっているのか、穢れなき粘膜は少年に自らの全てを、くちゅり、と晒す。

左右に開かれた処女粘膜は、蜜を纏って濃い桃色に上気している。柔らかい内部には浅

いシワも確認できて、柔軟な女体でも更に最も柔らかいであろう事が、確信できた。

生涯初の女性器直視に、少年の意識はすごい集中力を傾けている。

「ココ、こんな風になつてるんだ……なんか、綺麗で可愛いな」

そう素直に言いながら、無意識に触れる。軽く指先が撫でただけで、少女の美尻がピクつと震えた。

女性の粘膜は、まるで触れた事のないような柔らかさと弾力で、それは女性のみが持つ優しさの象徴のように感じられる。

(……柔らかいパン生地とかで形を作ったら、こんな感じなのかな……)

そんな事も、つい想像。

目の前数センチの女性器は、自らの蜜で濡れている。

軽く酸味を含んだ新鮮な出来たてヨーグルトにも似た、爽やかで甘く、しかし男性の性本能に力を与える、不思議な香りがした。

「触ると熱いんだ……それにヌルヌルに濡れてる」

「んんんっ——っんば……さ、触っちゃ、ヤあん……あぶん……!!」

軽く羞恥の抗議をしながらも、少女は少年への奉仕を続ける。多分、奉仕に意識を向けていないと、女性器を見られて触れられる恥ずかしさに耐えられないのかもしれない。

その証拠みたいに、オッパイと脣の奉仕が速度を上げた。

——ちゅぶぺろぶちゅぶつ、すりゆしゆりゆつすりすりりつ！

「あっ——っつ、強く吸って…！」

左右の乳房は更にムッチリと挟み込みを強めて、脣に含まれる亀頭部分はちゅううつと吸われる。脣から溢れた唾液で本体が覆われて、乳房との間で汗と混ざり、ヌルヌルスベスベの甘電で勃起が責められた。

本体を上下摩擦されながら脣に締められる先端部分は、サラサラの舌で鈴割れ部分を連続で舐め責め刺激。

「す、すごくっ…痺れて…！」

勃起全体から腰の奥までが、まるで鋭くて優しい快感のヒモでスリスリされるような、深く強い性刺激。

全身の感覚が腰の奥へと集められて、絶頂を求める肉体が力んで痙攣をする。もうすぐ、頂点がやってくる。

「こ、このままじゃ…顔に、かけちゃう…」

射精が近い事を伝えると、少女は「んむ…いいよ…んぶん」と、困惑と喜びが混ざった様子で、そのまま奉仕を続けた。

「ま、またっ…！」

顔射する。しかも公共の施設で隠れて。

「はあ……はあ……」

数秒の放出快感から降りてくると、誠は意外な言葉を耳にする。

「もう、誠ってば……こんなに出るなんて……」

〔誠……？ ハっ！〕

少女の無意識らしい一言で、少年は漸く気がついた。

今日ずっと一緒にいる藍に対して、感じていた違和感。今少女は「誠ちゃん」ではなく「誠」と呼んだ。

そのイントネーションでハッキリわかった。今触れ合っている少女は。

（……唯……藍じゃなくて、唯……っ！）

そうわかると、全ての違和感が解消する。

（……唯……唯……）

なんで唯が藍の格好をしているのかはわからない。だけど今日の、甘えてきた唯は、すつごくすつごく可愛いと思った。

もしかして藍の甘え方を見て、唯も本当は甘えたかったのかもしれない。

そう思ったら、いつもお姉さんぶっている唯がムシヨに愛おしくなった。

「ホラ、次はこっち向いて」

半身を起こして、少女の軽い身体を持ち上げると、向かい合わせにして自分の腰に座ら

せる。対面騎乗位の格好で身体を抱いて、長い髪をナデナデする。

「あん…ま、誠、ちゃん……」

思わぬ行為が、恥ずかしいらしい。しかし藍のフリをしても、確信している誠にはどう見たって唯。気がついてみると、表情とかそのまま唯だ。

なんで今まで気づかなかったのか、とさえ思えてくる。

とはいえ、まだ本人はバレてないと思っている様子。勝手知ったる幼なじみのバッグの中身で、誠は唯のポーチから「いつものアレ」をコッソリ探し出した。

少年が射精しただけで達していない唯は、誠の行動に気づかず、身体がモジモジと何かを求めている。恥ずかしそうに視線を逸らすと、口元を隠して小声で告げた。

「あ、あの…：誠ちゃん…：こ、このまま…：」

このままココでエッチしたい。という意志はわかる。

初体験できる。しかも唯と。そう思ったら、また勃起が、更に力を増して硬化。

「じゃ、ちよつと腰を上げて」

「う、うん…：えつと…：こんな、感じ？」

開脚してヒザ立ちな唯のお尻を持ち上げて、処女の秘処にペニスを当てる。パイズリフエラと指タッチで十分に蜜を含んだ女孔は、勃起以上の熱で期待を表していた。

肉棒の先端でツンと突つつくと、処女の肢体がクンッと反射的に背筋を丸める。

「あんっ——え、えっと……」

自分の反応が恥ずかしいのと、自ら腰を下ろす勇気が出なくて、戸惑っている唯。

更にユックリと挿入すると、キツイ締めつけで行き止まり。処女膜に行き当たった。

「んん……は……ま、誠……」

破瓜の瞬間が怖くて、藍の芝居も忘れている。

そんな姿も可愛くて、誠はリードしてあげる事にした。

幼なじみをそつと抱き寄せて、耳元で小さく囁く。

「やっぱり、ボクの初めては唯とじゃなきゃな」

「えっえっ——っ!？」

変装はバレていた。わからせると同時に、少年は白いリボンを素早く解いて、ポーチから見つけた「いつものリボン」で、ポニテに戻す。

思わぬ言葉と行為に少女がアワアワした瞬間、誠は丸い腰を引きながら、勃起を直進。

「っ——っいっ!」

——っつつぷっ!

一瞬だけの、小さな弱々しい抵抗があつて、唯の処女が喪失された。

「っい痛いっ——っ……あ……はああ……っ!」

薄い処女膜を突破すると、ゴム管みたいだった膣壁が、フワリと柔らかい真綿みたいな

肌触りに一瞬で変化。赤い鮮血が一筋、す…と流れた。

少女から女へと変えた勃起に対し、粘膜が感謝するかのような柔らかい抱擁をくれる。

「な、中の感触が…変わった」

「ま、誠……はああ……ん……！」

破瓜の強い痛みが遠退くと、少女の吐息にも艶が混ざり始めた。

少年は、苦痛にならないようにユックリと女尻を下ろしながら、肉棒を更に奥へと突き進める。

「あ、ん……ま、誠……そんなに、奥まで……うれ、しいい……っ！」

お尻が密着する頃には、誠のペニスは根元まで完全挿入。唯の腔内いっぱいまで押し込まれた男子の肉は、更に子宮の入り口にまで届いて、軽くノックしていた。

「はあ……はああ……なんか、奥が、ジンジンする……」

濡れた瞳を向けて、唯は更なる何かを、少年に求める。

「ああ、もっとジンジンさせてあげるよ」

上気して汗を浮かせる首筋にキスをする、仰向けになつて騎乗位に移行した誠は、幼なじみのお尻を上下させ始めた。最初はゆつくりと、次第に早く、もっと深く。

——つぶちゅぶぶ、つぶぶぶ……ちゅぶるちゅぶ、つぶちゅぶぶ……つぶ、ちゅぶつぶ、つぶつぶつぶつぶ！

「あんっ…あはあぁ…誠おっ——やつあんっ——っそ、そんなにいつ、強く、しちやはっ——っああああんっ——あたし、まこ、誠と…♡」

真っ直ぐ天を向いてそそり立つ、太くて堅くて熱い男根に、濡れて身を預ける少女の膣孔が深く強くと肉抽送をされる。

脱力した肢体は少年のするままだから、開脚された裸尻が上下に弾んでお尻の頬は柔らかく揺れて、男子の指をムッチリと食い込ませていた。

肉突きする勃起に対し、処女を失ったばかりの膣壁が、拙くも愛情溢れる締めつけ抱擁をくれる。

微細な粒に覆われた唯の膣壁は、各所で誠をキムキュルと締めつけてくる。粒だった粘膜が密着して、亀頭の裏や本体の弱点を、ヌルヌルの蜜で包んで刺激した。

ギリギリまで抜くと強く吸着し、根元まで押し込むと抱き締めて愛撫。唯の膣壁は誠に対し、普段は言えない素直な心を伝えてくれていた。

「まっ、まことうっ——っあつやああんっ——そんなに、おくまでしちやつ——はっあはああっ——あたし、ヘンにいつ——っ！」

肉詰めされる胎内が、更に熱を上げてゆく。真下からの肉突き上げで上下させられる女体は、肌全体が紅葉に染まり、霧状の汗を浮かせている。

縦長の楕円を描いて弾む巨乳は、先端の媚突を濃い桃色に染めて硬化して、細かい汗を



その後も、三人で柔軟体操とかして身体をほぐす。

トレーニングが終わったらシャワーで汗を流すのだけど、誠はさっきの女の子乗せ腕立て伏せで、モンモンとしていた。

植物園で唯と初体験をしてから一週間。なんだかんだで二人の時間が作れなくて、あれから一度もエッチしてない。

(い、許嫁だし…エッチしたし…:…またしたくても、普通だよね…)
ずっとそんな風に思っていた誠は、浴室に向かう姉妹の後を付いて、唯にコッソリ耳打ちする。

「な、唯…:…ボクの部屋で、一緒にシャワー浴びない？」

グッドアイデア。と思ったら、少女は真っ赤になって恥ずかしがった。

「なななっ、何言ってるのよっ——こんな明るいうちからっ！」

と、怒鳴られてビビる誠をヨソに、幼なじみはトットと浴室に入ってしまった。

「覗かないでよ！」

と、真っ赤になって忠告をくれて、扉をピシャリ。

「ちえり、何でだよ…:」

実は一緒にシャワーとかは、唯だつて恥ずかしいけどイヤじゃない。ただ、まだ朝だ。そういう微妙な少女心理がまだ読めない誠は、汗を流す為に、ボヤきながら自分のマン

シヨンへと戻ってゆく。

そんな二人を、藍はさり気なく観察していた。

「ふう……あ、エッチしたいな」

湯船に浸かりながら、誠は欲求の独り言。背中で感じたお尻の柔らかさや暖かさ、ちよつと湿りも含んでいた重さなど、触れた女体が頭を過ってしまう。

それだけで、誠のペニスはグンつと欲望の力を込める。

「なんて素直な……そりゃボクだつてしたいけどさ……」

若い肉体は、一度頭をもたげた性欲求を簡単には収められない。湯船に身を沈めながらも、股間の肉棒は角の如き堅さを維持していた。

「こんなにお預け状態になるなら、この間のエッチで、もつといっぱいしておけば良かったよ」

まぶたの裏には、目の前数センチで眺めた処女秘処の姿がハッキリと灼きついていて

思い出すだけで勃起はまた力を集めて、健気にも唯を求めていた。

「しかたないな、こうなったら一人寂しく……」

自慰で処理。とか思っていたら、何と脱衣所からガタガタと物音が

『誠ちゃん、入ってる？』

「あ、藍っ!!」

声でわかかって驚いた直後、曇りガラスに映ったシルエットに、また驚かされた。

ボンヤリとした輪廓は、どう見たって肌色オンリー。そして扉が開かれると、何と全裸の藍が浴室へと、シズシズと乱入してきた。

「えへへ……シャワー使わせて貰おうかと思つて〜」

「いや、藍っ……つていうか、全裸じゃんっ。せめてそのっ、バスタオルくらい……!」
思わず見てしまった藍の裸は、白くて綺麗だった。

双子だからか、巨乳は丸くて上を向いていて、乳首の桃色なんて瓜二つ。

引き締まったウエストや大きなヒップ、ムッチリした腿から足首への、キュつと絞られた美しいラインなど、まさしく姉妹揃つて魅惑的だ。

湯船の中で慌てて背を向けた誠をヨソに、妹は鼻歌交じりで汗を流すと、石けんで肢体を洗淨してツルツルお肌を磨いてゆく。

(ま、まずい……こんな近くに、裸の藍……)

反響する鼻歌が何となくエッチで、しかも石けん以外の良い香りもする。

一週間で飢えさせられた肉棒は、今や心臓の鼓動に合わせてビクつビクつと脈打ち、透明なカウパーをこぼして女体を求めていた。

(いや、ダメだろ……唯としたんだし……!)

肉体の欲求に、理性を以てダメ出し。

そんな誠の葛藤を知ってか知らずか、藍はシャワーを終えたらしい。

「ん……はくサッパリしたく」

これで帰るだろうから一応安心。と思っていたら、背後から柔らかい裸身でギュっと抱き付かれた。

「まっことちゃくくんっ♡」

「わああっ——っあ、藍っ！」

背中に預けられた巨乳が、タプンっと柔らかく弾力を示す。胸に回された両腕が弱々しい力で、そんな触れ合いでも少年の欲求が刺激される。

背後からヒョイツと覗き込んできた藍は、湯の中の勃起に羞恥しながら嬉しそうだ。

「わあ、相変わらずおつきい。それに、私に欲しくて、そんなになってるの？」

「いや、これはその……っっていうかっ——」

アワアワする少年の耳に、少女は小声で核心を突く。

「……お姉ちゃんと、エッチしたでしよ」

「なっ、なぜそれをつ——っあわわっ！」

正直な誠に、藍は怒る事もなくニッコリと微笑んだ。

「やっぱりね。この間、私のリボンを持ち出して誠ちゃんとデートしてたし。そのあと

急に、お姉ちゃんがスカートとか穿きだしたし」

誠の動揺よりも、それらでわかつたらしい。

濡れた裸身で抱き付かれてドキドキしている少年に、少女はちよつと震える声で、誘惑のボイス。

「ね、誠ちゃん……だから私とも、エッチしたくない？」

「えっ——っあ、藍とも……っ!」

思わず振り向くと、軽い言葉とは裏腹に、少女の瞳は真剣だった。

「私だって、誠ちゃんの許嫁だもん……お姉ちゃんだけなんて、ズルいよ」

ジッと見つめられると、言葉も出ない。とはいえ双子の姉妹を二人ともなんて、ソレはソレで女つたらしな気がする。

「でも、その……藍ともなんて……なんか、お調子者にならなくなかない？ ボクが……」

誠のすぐ近くから、フンワリと石けんの誘惑芳香。抱き付く肢体の濡れた髪からは雫も垂れていて、少年はドキドキしながらドキマギして、言葉もちよつとヘン。

元来、男は女の誘惑を断れる機能に関しては著しく低性能だし、ソレは女も生まれつきに熟知している。

「そんな事ないよ。女の子の方から『いいよ』ってお願いしてるんだから、誠ちゃんは堂々と、自分の欲求に従っていいんだよ……ちゅ」

優しく囁きながら、耳にキス。誘いながらもちよつとたどたどしいトコロが、余計に男子の本能を活性化する。

「このままだと、きつと私とお姉ちゃん、すつごく仲悪くなっちゃうよ？ そんなシユラバを回避できる男の子は、二人が愛してる誠ちゃんだけだもん〜」

「う……」

そんな言い方されると、何もしない方が悪い気もしてくる。

それに誠だつて正直を言えば、藍の事を嫌いなワケなんて、何もないのだ。

「それは……いや、いや……それではボクは不貞者というか……うう……」

なんて苦悩に喘いでいたら、少女はまたおかしな事を思いつく。

「誠ちゃんたら、律儀さんなんだから〜♡ あ、それじゃ〜こうしてみよっか」

裸のまま浴室から退散したかと思ったら、すぐに何かのヒモを啜えて戻ってきた。誠を後ろ向きにして数秒。

「いいわよ、コッチ向いて」

と言われて振り返ると、ソコにはなんと、藍ではなく唯の姿。

「わわっ、唯っ——つて……ポニテにした藍かよ！」

キッチン辺りでヒモを見つけてきた藍は、サラサラのストレートヘアを自らポニーテールに纏める事で、なんと唯に化けたのだ。

「えっへへ、これで私も『お姉ちゃん』〜！ さ、誠ちゃん、エッチしょ！」

多分にクオリティの低いモノマネらしき言葉遣いで、藍は正面から抱き付いて誘惑。一方で裸身に抱き付かれる少年は、予想外にドキドキさせられていた。

「あ、藍……」

と、相手が誰かはわかりきっているのに、姿が瓜二つだモノだから、まるで本当に全裸の唯に抱き付かれている気分だ。

前から抱き付いたからか、湯船の中でギンっギンなペニスに、藍もつい注視。

「あん、さつきよりおつきくなってるう…お姉ちゃんだから？ ずるうい♡」

蕩けた言葉で、しかし嫉妬交じりで恥ずかしそうに視線を泳がせた藍。ポニテの妹はチユッと口づけをくれると、大胆にも同じ浴槽に入浴。

「えへへ…誠ちゃんの為にね、本とかでいっぱい、勉強しちゃった」

と話す藍の手で、誠は湯船の縁に座らされて、大きく開脚させられる。

太く堅く力むペニスに、少女は頬を染めて笑顔をくれると、湯船の中で四つん這いになって、お尻を向けた。

「わわっ——藍…っ！」

半身を湯に浸かった藍が、濡れた大きなヒップを湯から突き出している。丸い美尻の中心には、濃い桃色に上気した処女の秘処が、湯とは別の、蜜に濡れて粘膜を見せていた。

双子だからか、あるいは誠が唯しか知らないからか、粘膜の作りは同じに見える。薄い花弁や息づく膣孔、ツルツルの会陰を超えた近くで収縮する後孔まで、濡れて艶めく姿までそっくりだった。

「えへへ、こんなの、いかが？」

ニッコリと微笑みながら、藍は自らの秘処を誠のペニスに密着。

「あん……誠ちゃんの、熱くて堅い♡」

濡れ媚溝で数回だけ勃起を愛撫すると、今度はムッチムチの腿で勃起をサンドイッチ。丸いプルプルヒップが腰に押しつけられると同時に、女体で一番柔らかい粘膜とヌルヌルぷにぷにの内股で、堅い勃起がムチュウ：つと肉圧迫される。いわゆる素股だ。

向けられた尻はドンつと大きく、二つの脂肪はパツパツに腰と密着。勃起を含んだ大きなヒップを見下ろすその眺めは、まるで背後位そのものの如し。

熱く濡れるクリトリスや左右の内股付け根で、勃起を媚肉締めつけにされる。それだけで、柔らかい粘膜に挟まれたみたいなの、不思議なプルプル肉圧でペニスが責められた。

「ううっ……あ、藍……けっこう、気持ちいい……！」

勃起の中心が勝手に力み、下腹部全体が快感で圧縮される。視線は押しつけられたヒップや媚尻、勃起と密着しながらもそのほとんどを視界に晒している粘膜に、釘付けだ。

「誠ちゃん、喜んでくれてる〜」

薄目で喘ぐ少年の反応に気を良くした藍は、ここからが奉仕の本番と、大きな尻を前後させ始めた。背後位素股、と呼ぶべきプレイか。

「えつと……こうかな。んしょ、んんつ……あん、私も、感じちゃうう……」

濡れた処女粘膜をペニスに押しつけるように、太い男根に合わせて前後に愛撫。

——っちゃぷっぬりゅっ……ぬるりゅっぬりゅっつちゅっぬりゅちゅっちゅっ。

最初はユックリだけど、すぐに感覚が掴めてくると、拙いけどリズムカルな内股。ニ。摩擦へと、変化してゆく。

誠だけを気持ちよく。とか思っていたらしい藍だけど、ペニス本体の熱や浮き出て脈打つ血管の起伏に敏感な粘膜が刺激をされて、予想以上に快感を得ている様子。

まぶたを薄めて、腰は前後だけでなく上下動まで始めて、自らの行為に唇から溢れる吐息が、乱れてゆく。

「は……んあんっ……誠ちゃん……私……私……！」

「藍……ボ、ボクもっ、いい……っ！」

蜜でヌルヌルの熱粘膜で、本体の上面や肉カリ部分が摩擦をされる。柔らかい腿に挟まれる勃起の左右から下腹部全体へと、微弱で鋭い連続甘電で痺れさせられた。

濡れたパツパツ美尻を押しつけられる下腹部の圧迫感が、腰の奥でググルつと焦れたい快感圧縮に変化されて、射精への欲求が高められてゆく。



唯は赤系で藍は青系。二人とも、道着の下から艶々の腿がニョッキリと根元まで剥き出しで、正直、目のやり場に困ってしまふ。

（しかし……藍はともかく唯まで……）

以前の唯だったら、道着は絶対、ビシッと上下とも着用していた。なのに今は藍と一緒に、セクシーな露出のスタイルに身を包んでいる。

（やっぱりこれも、エッチしたからかな……）

なんて事をつい考えてしまふ。と同時に、女体を思い出してドキドキする若い肉体。

「ゴホン……あの、二人ともどうしたの？」

道着と太腿というミスマツチの魅力に視線をチラチラさせながら、沸き上がる興奮を誤魔化すように咳払いして尋ねたら、意外な答え。

「誠と、その……え、エッチしてから、けっこう時間が経つけど、赤ちゃんできてる感じとか、全然しないでしょ？」

「だからね、こうなったら誠ちゃんと勝負してえ、一本取った方がお嫁さんって事にしようかな、とか思ってた♡」

「思ってたって……」

二人とエッチしておいてナンだけど、コッチの気持ちは無視。

とか思ってたものの、唯の美顔が妙に赤いし、衣装と相まってとてもエッチだ。

永年の付き合いだからわかるけど、これは本音を隠している時の顔でもある。

(…ま、何だかわからないけど、二人に付き合った方が身の為だな…)

真意はともかく。そしてこの試合は、負けるワケにはゆかない。とも思う。

誠が道着に着替えている間に、二人はジャンケンで試合の順番を決めたいらしい。姉が先で、次が妹。

一本勝負らしいから、少年としては三分のあいだ捌ききればOKだ。

「それじゃ、二人とも向かい合って〜」

およそ審判らしくないノンビリした声で、藍が告げる。

向かい合った誠と唯が一礼すると、試合開始。

「始め〜っ!」

「行くわよっ、誠っ!」

何だか目が燃えている唯が、鋭い中段蹴りを見舞ってきた。

全身の動きから読めていた攻撃だから、誠はちよつと身を反らしてかわす。

「おつと…唯、なかなかの蹴りだな」

「まだまだよっ…セイっ!」

それから三分間。ポニテ少女はまさしくポニテを靡かせながら、突きや足下への蹴りなどを、フェイントを交えつつ放ってきた。

しかし誠からすれば、注意さえしていれば全て見切れる動きでもある。

「セイっヤっ……はあ、はあ……」

「はっい、三分終了でっつす！」

唯の息が切れる頃、勝負は終わった。

捌いていただけの誠は勝利者ではないけど、唯の勝ちでもない。

「取りあえず引き分けてっトコだな」

「むう……」

タオルで汗を拭いっつ、ちよつとふくれっ面の唯だった。

次に藍との試合。

「えっへへ。誠ちゃん見てて、一発KOしちゃうよ」

一発KOされたら見てられないと思う。とか、そんなツっこみが頭を過りながら、誠は

審判を務める唯の声を聞く。

「それじゃ一本勝負、始めっ！」

「いっくよりっ、それえっ！」

能気な掛け声で、リボン少女のパンチが炸裂。短い期間でかなりの上達ぶりを見せた

藍とはいえ、やはりスピードもキレも、唯には及ばない。

「それっ、えいやっ！」

この試合も、誠は三分を捌ききるのみ。正直を言えば、唯よりも楽だった。

「ひい、ひい……もうだめ〜」

三分を待たずに、息切れない藍。勝負の判定は、審判の唯による視点から下された。

「はい、挑戦者のギブアップと見なします。藍の負け」

「ええ〜っ」

「今『もうダメ〜』って、自分で言ったでしょ」

「あうう……」

姉の判定に、ヒザを突いてヘコたれる藍だった。

「勝負は三人で引き分け、てトコだな」

（うん。自分、良いコト言った）

と思っていたら、お冠らしい二人が不服を申し立てる。

「あぁくん、誠ちゃんズルい〜。大体、私やお姉ちゃんが一对一で、誠ちゃんに勝てるワケないでしょ〜！」

「ま、まあ、その通りよね……うん」

「え〜っ」

自分たちから言い出したのに、何かコッチのせい？　って言うか、唯なんで「勝てるワケない」とか認めてるの？　なんかヘンじゃない？

とか、理不尽な申し立てに思う少年をヨソに、二人は勝手にヘンな勝負を言い出した。「私とお姉ちゃんチームVS誠ちゃん。で、もう一勝負！」

少年の了解も納得もなしで、二人は誠を挟んだ立ち位置で構える。

(なんだなんだ？ 一体なにがどうなってるんだ？)

ワケがわからないけど、とにかくヘンな試合が始まった。

誠を中心に、左右に展開する、セクシー道着の双子。

挟まれた状況を見れば一見すると不利っぽいけど、場数を踏んできた誠からすれば、そうでもない。

「ようし、ドコからでもかかってこい！」

二人の動きに注意を払いつつ、左右の足をランダムに入れ替えて、軸足で軽い円の動作。中心にした軸足からちよつと大きい距離で回れば、二人の直線上から離れる事ができるのだ。

とはいえ、流石に二人とも格闘技を鍛錬してるし、何と言っても双子の姉妹。

藍が上段蹴り攻撃して、かわした誠がまた上段突きで追撃など、コンビネーションはかなり良い。

誠も、油断はできないと思いつつ、内心では乱取りとして良い。とか思っている。

「それっ、えっ！っ！」

「チャンスつ、セイっ！」

「おっと…氣い抜けないな」

それでも三分捌ききって、誠の勝利。

「はひい…誠ちゃんのイジワル〜」

勝負に対してイジワルって。とか思いながら、これでもう終わりだろ。

と安心していた少年の背後を、藍が急襲。誠は羽交い締めに使われてしまった。

「わわっ。藍、試合は終わりだろ？」

「こうなったら奥の手っ、お姉ちゃん。先に誠ちゃんを参らせた方の勝ちだよ！」

何やらまた、一方的に勝負そのものが変更されたっぽい。

振られた姉だけでなく誠も、何の事だと思っていたら、リボンの少女は「ちよつと横になって」と言って、少年を寝転がす。

藍は道場で仰向けとなった誠の上に、ホットパンツのパツパツ巨尻で跨がると、自らの道着をはだけてTシャツの胸部分を露出。更に上から臀を重ねてきた。

「誠ちゃん、ちゅ♡」

「んちゅ…あ、藍？」

「…ハっ！」

突然のキスに慌てる誠と、妹の提案に漸く気づいた唯。ポニテ少女は焦って上着をはだ

けると、妹みたいにTシャツを見せつつ誠と脣を重ねてから、妹に宣戦布告。

「ちゅ……ま、誠を参らせるのは、あたしなんだから！」

「ち、ちよつと待って。確かもともと、一対一の勝負では……？」

それがいつの間にか「誠VS姉妹チーム」となって、また「姉VS妹」に試合内容が変更されてるではないか。

という誠の意志や抗議など聞く耳持たず、藍は再び誠にキス。

対する唯は、何とシャツを捲って巨乳を溢れ出させる。恥ずかしがる指で誠の道着を捲り上げると、下を紐解いて少年の勃起を露出させた。

「あわわっ……ちよつと……！」

二人とのキスで、誠のペニスはグンッと血を集め始めていたから、剥き出されたと同時にビシッと完全勃起を示す。

「きゃっ……ま、誠ってば、何でおつきくしてるのよ……っ！」

「ひゃあ……誠ちゃん、私たちのエッチ道着に興奮してくれてたんだ〜♡」

エッチ道着とか言っちゃってるよ。とツっこむ余裕すらなく、けっこう恥ずかしい。

道場の真ん中で陽光を浴びつつ、天井を指すように力強くそそり立つ男性器。

双子姉妹は羞恥に頬を染めながら、何度も受け入れて教えられた、その逞しさや熱や存在感、そして性の快感を思い出し、視線が逸らせなかった。

「し、しようがないわね……まずはあたしが、何とかしてあげるわよ」

言うが早いのか、唯は四つん這いになって目の前の勃起に女体を寄せると、大きな双乳でむにゅつと挟み込み、更に濡れた舌で舐め舐め愛撫。

「あゝっ、お姉ちゃんズルいゝっ！」

「れる、れる…勝負は、早い者勝ちでしょっ…んしょ、んしょ…ぺろ…どう？ 誠」

妹の物言いを却下して、道着もシャツもはだけたポニテ少女が、舌刺激にプラス巨乳での上下摩擦を開始した。

直後、藍も双乳を剥き出しにして、同じく舐め愛撫と巨乳奉仕に参加。

たつぷたぷに実った計四つの柔脂肪で挟まれて、更に熱い濡れ舌で弱点を舐め上げられる。女体ならではの弾力で刺激をされてしまつては、勃起は自制なんてできなくされる。

「んぐぐ…唯…藍…気持ち、いいよ…！」

巨乳の圧迫感、吸い付くようでありながらも、程良く重たくて焦れたい。細い舌で愛撫される弱点からは、腰の奥に向かって微弱で鋭い甘電性感が流され続ける。

「えへへ…さすがの誠ちゃんも…ぺろ、ちゅ…こんな攻撃には、弱いからね…ちゅ♡」

「まったく…んちゅぶ…んくん…ホントに、エッチなんだから…ぺろ、れる…」

格闘技では勝てない少年が、自分たちの身体や奉仕には完全に無抵抗。そんな事実が、姉妹たちの女の自尊心を、喜びで満たしてゆくようだ。



「んちゅ……誠ちゃん……すつごくガチガチになつてる♡」

「それじゃ藍、まずはあたしからね」

「えっ……うっ……」

先に奉仕を始めたからか、主導権を發揮して妹をよけさせた姉。誠の首を抱いて上体を起き上がらせると、自身は右側を下に横寝状態になった。

そのまま媚尻を突き出すようにして、誘うようにホットパンツとショーツを外す。

「ま、誠……うふふ……」

ちよつと嘸んだりしながらも、道着の上とシャツをはだけて裸尻を開脚。

天井に向かって左足を伸ばしつ、上気する濡れ媚溝は掌で隠して、恥ずかしいのをガマンしての拙い誘惑。

「あ、あの真面目な唯が、こんな淫らな誘惑にチャレンジ……!!」

誘いながらも耳まで上気させて、羞恥に視線を逸らしている。しかもピンと伸ばしたつま先や割れ目を隠す指が震えていて、何とも健気で可愛い。

隠した指の下では、熱い恥蜜が一筋、腿に溢れている。肢体やパイズリで興奮しているのだろう。

はだけ道着と下半身露出という乱れた姿に、少年の性本能はただ肉欲だけで占められてしまう。横寝の格好で柔らかく重なる巨乳も、オイデオイデと呼んでいる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!